

第1回 魅力ある県立短期大学づくり検討委員会 議事録

1 日時

令和6年5月31日（金）午後4時から午後5時20分

2 場所

県庁6階大会議室

3 出席した委員

松田委員，村井委員，高津委員，黒木委員，津曲委員，森委員，福留委員
飯干特別委員

4 議事の概要

(1) 座長選出

委員互選により，津曲貞利委員（鹿児島経済同友会特別幹事）を座長に選出

(2) 座長あいさつ

- ・ 鹿児島で長く経済活動に従事しているが，県立短期大学の卒業生には，多くの方々と面識があり，いずれの方々も，私の知る限り，大変優秀であり，行政，各種団体，金融機関など堅実に仕事をされるの方々だと思っている。
- ・ 全国的には短期大学は厳しい局面に入っていると感じるが，鹿児島においては，様々な事情の中で短期大学の学生が多く，かつほとんど県内で活躍しているということで，地域経済にとって重要な存在だと思っている。
- ・ 一方，人口減少の中で短期大学そのものが厳しい現状にあり，今回，魅力ある県立短期大学づくり検討委員会が発足したところであるので，公立短期大学という伝統をしっかりと検証しながら，将来に向けて魅力ある県立短期大学がどうあるべきかということ，様々な立場の方々と一緒に議論して提言までできればと思っている。

(3) 協議・説明

① 事務局から，資料に基づき，以下の事項を説明

- ア 魅力ある県立短期大学づくり検討委員会の設置について
- イ 県立短期大学の現状について
- ウ 全国の短期大学を取り巻く状況等について
- エ 検討事項及びスケジュールについて

② 飯干特別委員から，資料に基づき，県立短期大学による県民向け講座等について説明

(4) 主な意見等

① 松田委員

- ・ 昨年度、鹿児島大学法文学部の編入学の定員を10名から20名に増やしたが、その背景として、学内の様々な事情もあるが、毎年、優秀な県立短期大学の卒業生に受験をしてもらっていることも大きい。
- ・ 今でも県立短期大学の卒業生の受験者が一番多く、それだけ県立短期大学を卒業して、さらに専門的な学びを求めている学生がたくさんいるということ。
- ・ 入学した学生は、先ほど事務局から説明があったように、前向きであると私も感じている。
- ・ 平成29年度から地域社会コースを法経社会学科の中に設置したが、そこに編入する学生は地域の課題をよく踏まえており、地域の中に入り込んで、本学に1年から入学した学生も引っ張るようなリーダーシップを発揮している学生が多いと伺っている。
- ・ 国際的な視野を持って、自ら進んで、「トビタテ！留学 JAPAN」に応募したり、海外で研修する学生もいると聞いている。
- ・ そういう意欲的な学生が編入学してくるのは、法文学部としても、非常にありがたい。
- ・ 鹿児島県においては、女性の短期大学進学率が非常に高いという状況があり、そのような中で、多様なキャリアパスをそういった方々にどのように提供できるかという視点からの法文学部の定員増を考えていったところ。
- ・ 短大のニーズが高いということは、鹿児島県の特長や家庭の事情もあるかもしれないが、地域に様々なニーズがあるということであり、そういう方々に学びの機会等を失わせないということが非常に重要であると思うので、この委員会で検討することになると思うが、短期大学のまま魅力をより高めていくということ、それを重視した委員会運営をしていくべきだと思っている。
- ・ どのようなすれば、高校を卒業した生徒が、県立短期大学に進学したいと思うかが重要である。
- ・ 少子化の影響もあるが、先ほど入学者、志願者が減ってきているという説明があったが、その入学予定の段階で、高校生が県立短期大学についてどう考えているかということについて、調査結果があれば、なければこの委員会で、入り口の部分のニーズ、出口の部分は企業へのアンケート調査というのが先ほど紹介されたが、入り口の部分で、どういうところに魅力を感じ、どういったところに対してこういうのがあった方がいいと思っているのか明らかにしていくと、どういうカリキュラムを作っていけばいいのか明らかにになると考える。

- ・ リカレント教育について、先ほど飯干学長から説明があったが、精力的な取組をしており、結構な数の方が受講されているところを見ると、地域の皆さんにとってはなくてはならない学びの場だと感じるので、その部分の魅力を高めつつ、かつ、若年層にも認識してもらえような、大学づくりが必要である。

(飯干特別委員回答)

- ・ 入学者については調査を行っていないが、卒業に当たっての満足度調査というものは実施している。
- ・ 入学者に対してもそのような調査は必要だと感じている。

(事務局回答)

- ・ 先ほど説明した既存学科の教育内容の見直し等のところで、県内産業界が県立短期大学に求めるニーズを把握すると申し上げたが、その一つに高校生に対するニーズ把握も重要だと思っているので、この委員会で検討したいと思っている。内容や手法については、ワーキンググループ等を踏まえて委員会で提案させていただきたいと考えている。

② 村井委員

- ・ 三重短期大学は、津市立の短期大学で定員 700 名、学科構成も生活科学科、食物栄養学科、第二部、法経科と県立短期大学と似ており、役に立つようなことがあればと思い、参加させていただいた。
- ・ 本学はずっと県内からの入学者は 6 割で、県外が 4 割。就職率も全く同じ、県内 6 割、県外 4 割である。
- ・ 県立短期大学について、県内出身者が 9 割であるが、最近（県内）就職が減っているところは、これから原因等を解明されると思うが、せっかく県内から入学しており、魅力ある企業がたくさんあると思うので、そこが回復されればいいと感じたところ。
- ・ 三重短期大学は共学であるが、男子学生の比率が非常に上がってきており、特に生活科学科の居住環境コースはデザイン系で、建築士の受験資格が取れ、昨年度は男女比率がほとんど半々で男子学生が増えてきている。
- ・ 県立短期大学では、定員が割り込む学科もあるという話もあったが、高校を卒業したら起業したいといった男子学生も多いと思われ、また、男子学生は短大には行かないという時代ではないと思うので、教育内容の見直しにより、男子学生の増加につなげることができると考える。
- ・ 栄養士の男性職員も増えてきている。栄養士は病院だけではなく、スポーツクラブなどのスポーツ栄養や企業の保養施設等でも求められている。受験相談会でも男子学生が尋ねてくる姿もあり、このように時代の流れとしては、短期大学においても男子は新たなマーケットになり得る。

- ・ 先ほどリカレントの話があったが、三重短期大学では、第二部において、働いている方が教養アップしたいとか、子育てなどで家にいる時間が長いので、子育てしながらもう一度大学生になりたいという方を対象に、令和3年度から長期履修制度を設けたところ。
- ・ 当初、短大に長期履修制度を作っても人は来ないと言われたが、昨年度は10名、毎年5名から10名ほど来ている。職業も市議会議員、現職の自衛官、子育て中の方もおり、思っていた以上に多様な方が来ているので、一時的に第二部の社会人が減っていたが、長期履修制度を取り入れて、学内に滞留する学生数を増やして、全体的に定員を満たしているところもある。最長4年いられるので、学内の学生数としては、社会人が増えているということが全般的に言えると思う。リカレントと男子学生の取込みというのが、今後、県立短期大学でも考えられる。
- ・ 三重短期大学では、毎年新入生と卒業生に必ずアンケートを行っており、学内分析している。就職先の企業100社には3年に1度、アンケートを行っている。どういう学生かということ把握している、データよりもコメントが役立っているが、定期的にデータを取って分析することは大事だと感じている。
- ・ 今後、独立行政法人化されると、基幹教員が実現できるので、企業の方が教員として正式に入り、リスキリングの授業も、短期大学でありながら対応できるので、活用することで学生の開拓ができると思われる。

③ 高津委員

- ・ 主な検討事項について、定員等の見直しについては、減らせば現教員を減らさないといけなくなるので、既存学科の教育内容の見直しと関連してくる。減らすのであれば、どういう形で学科を新たに組み立て直すかということが一点。
- ・ 今、世の中に求められている人材は、文学を中心とする人物ではないだろうということは認識している。そうすると文学科の中身やネーミングについて検討しないといけない。
- ・ 飯干学長から説明があった、県民向けの講座には魅力的、面白そうなネーミングをしており、これが文学科に繋がっているということ、社会に向けてアピールするような学問システム、企業がこういう人材が欲しいという教育内容を組み立てるべきではないか。
- ・ 教養科目の強化について、企業サイドから見ると、すぐに役に立つような力を持っているかどうか、日本語の教育においてもコミュニケーションという面から組み立てられたもの、そういった今の社会をマッチするような形で、教育内容全体を見直していくべきではないか。

④ 黒木委員

- ・ 予測不可能なこれからの時代に、どのようにしてどのような資質能力を子どもたちに身につけさせていくべきかという状況にある。
- ・ その資質能力で重視されている主体性，コミュニケーション能力，発信力，表現力，チームワーク，協働と呼ばれるものなどを身につけていくべきではないか。
- ・ 今の教育は，昔のように先生が一人で淡々と喋るのではなく，子ども達同士が議論しながら，1人1台タブレットを見ながら授業しているという姿が高校でも見られている。
- ・ これから短大や大学に進む子どもたちもそのような勉強を欲していると思う。
- ・ 少子化が進む中で，控え目な生徒であっても一人一人がリーダーシップをとって，対応しないといけない場面がたくさん出てくると思うので，その中で生き抜いていく力をつけないといけないという意識で高校教育を進めているところ。
- ・ 現在，定員等で苦戦している文学科の在り方について，教養というものはある程度時間をかけてやっていくものであるならば，日本語日本文学専攻で言えば，インバウンドなど外国に背景を持った方々が来られることを踏まえて，日本語教育を教えられるような人材が育たないかなど，そのように転換していくのがこれからの在り方になっていくと感じる。
- ・ 現実的な問題からの視点だと，入学者選抜の在り方が，どうなるのか興味・関心がある。
- ・ おそらく一般選抜の方で，入学者の確保に苦しんでいるという印象があり，国公立大学に合格した生徒が県立短期大学への入学を辞退していくのは，一般選抜だと思うので，その部分が推薦選抜にシフトするなど工夫の余地があると思う。

⑤ 福留委員

- ・ 若年人口の推移を見ると，少子化がものすごい勢いで加速している。
- ・ 鹿児島県の出生数について，2022年は1万人をкаろうじて超えているが，2012年と比較するとおよそ3割減少している。2000年と比較すると35%減少している。
- ・ 鹿児島は離島の方で特に非常に出生率が高いということで，徳之島町が日本一となったりするが，鹿児島も決してうかうかしてられない状況にある。
- ・ この前提のもとに県立短期大学の在り方を考えないといけない。そういう状況を考えると，定員は見直さざるを得ない。
- ・ 既存学科についての見直しについて，時代の要請に対応とあるが，今，

経済界で一番欲している人材は、半導体やデジタルに係る人材。また、高齢化も進んでいるので福祉関係の人材も需要がある。さらに、国際化も今後ますます拍車がかかるのでグローバルな人材といったところ。

- ・ これがおそらく今の時代の要請に対応する人材であるが、そもそもあらゆる業界の人材が不足しており深刻な問題である。
- ・ 鹿児島県は農業県として食品産業が盛んで、農業が北海道に次いで産出額が全国2位と大きく、食品加工も大きなウェイトを占めている。
- ・ そういふところの人材も当然必要としているし、また交通インフラもまだまだだというところもあるうえ、建設業も人手が足りない。このようにどの業界も人が足りないというところで、おそらく新卒に限った話でないと思うが、採用を増やしても来てくれないなど、これから先は若年者の取り合いはますます厳しくなると思われる。
- ・ 人手不足の一番の理由は、全体的な求人数の高まり、県外企業からの求人がある。県外企業の魅力的なところは給与面。県内企業では太刀打ちできない給与を提示するので、経済界の課題として考えなければいけないと思う。
- ・ そういった状況を踏まえて、既存学科の見直しや時代の要請に対応した教育内容の充実について、あらゆる業界の人手不足にも対応しなければいけないこともあり、全部いいとこ取りはできないと思うが、どのようにして取捨選択していくかは、大事だと思う。
- ・ 教養について、生成AIが世の中に出てきたので、自分の頭で考える力が失われていくのではないかと思う。それでも人間としての存在意義は、AIに使われるのではなく、使う側にならないといけなないので教養はより大事な部分になると思う。
- ・ これらを前提に県立短期大学の魅力を高めるという意味では、たくさんの課題や険しい道のりが考えられるが、ここで改めて議論するのは大きな機会だと思う。

⑥ 森委員

- ・ 地域における産業界にとって、最大の課題は人手不足である。
- ・ 隣県に人が取られるという形の地域間競争のようなことが起こっている中で、人口減少によりこの流れに拍車がかかることを前提で考えていくこととなる。
- ・ 今の地域経済をしっかりとしようとすると、物理的に人がいないことに対応する必要がある。経済の視点だと県内定着は重要な話だと思っており、今回の資料を見て県立短期大学の実績は改めて鹿児島にとって役割が大きいと感じたところ。
- ・ 定員割れが生じていることについて、いろいろ言われるが、この検討委

員会は、定員割れをしたからといって安易に四年制化にしていくという話ではなく、短期大学としての活用をしっかりと考えていくということだと思ふ。今の体制でどう魅力ある形にしていくかということについて、方向性としてはしっかりとしていると感じられる。

- ・ 定員割れについては、コロナが明けて個人の価値観が変化していることが影響していると思われる。
- ・ 基本的には学生にとって魅力がどうなのかという話から始まり、それを受け入れる企業がどうなのかという部分が噛み合っている必要がある。
- ・ 学生の価値観の変化を押さえた上で、企業側としてもどうなのかという視点で見ると良いと思ふ。
- ・ キャンパスを視察という話もあったかもしれないが、学生の声を聞いてみたいと感じたところ。
- ・ 独法化については、環境変化が著しいので柔軟に対応していくとなると、そのような体制は必要だと思われる。ここは今後、勉強させていただきたいと思ふ。
- ・ この地域においての学校について、企業でも同じことが言えるが、これから持続可能な形で運営していくとなると、経営の視点も大事だと思ふので、そのようなことを見える化することで、うまく運営できるのであれば、検討する価値はあると思ふ。

⑦ 津曲座長

- ・ 俯瞰して見ると、全国の短大は、ほぼ定員の50、60、70パーセントで減少し、大変な状況である中で、県立短期大学は、定員が割れたと言っても浮き沈みがあるだけで、全体としては割れたうちに入らない数字だと思ふ。
- ・ 県内高校卒業者の大学等進学者のうち県立短期大学への進学率が12%という数字も、ある意味、非常に高い数字だと思ふ。
- ・ この数字がこれから右肩下がりになるかはこれからの考え方だと思ふ。
- ・ 今の県立短期大学の魅力はしっかりしたものがあると思ふが、その魅力をさらにバージョンアップできるかは、この委員会で皆さん方の意見をたくさんいただきながら進めていければと思ふところ。
- ・ 学生にとっての県立短期大学という視点は絶対外せないところであり、これをしっかりと考えないといけなない。
- ・ 学生にとっての県立短期大学という位置付けとは、将来の鹿児島を担う、未来においても能動的に社会に関与できる県立短期大学と位置づけており、望ましい学生像を描く中で、将来にわたって夢を持って頑張られる学生にとっての県立短期大学というのが大事だと思っている。
- ・ そのため、地域、企業からの視点は大事なところであり、18歳人口を鹿児島にどう留めるかという視点の中で県立短期大学がどういう役割を果た

すことができるのか、県立の短期大学の使命の極めて重要な視点なので、よく考えないといけない。

- ・ 細かいところ言えば、定員の見直しについては、一度定員を減らすと増やすことは難しくなるので、例えば学科の人数配分を変えるなどの方法を考えた方がよい。
- ・ 入学者選抜について、今は年内決定率を大事にする時代になっており、推薦により年内に県立短期大学に行くを決める学生をどれだけ増やすか、県立短期大学にしか行きたくないという学生をどこまで増やすか。
- ・ 鹿児島大学を受験して不合格であれば県立短期大学に進むという道もあるが、この数字は浮き沈みが激しいので、専願で県立短期大学に行くというのが一番であり、どのようにして県立短期大学に行きたいと思ってもらえるようにするのは、ここでの議論だと思っている。
- ・ これらの視点で、学科定員の見直し議論、学科のカリキュラムの見直し議論は重要だと思う。それから今後大学の独立行政法人化というような、エッジのきいたオリジナリティーのある運営ができる形に、どのように進めるかも大事になる。
- ・ もう1つの視点として挙げられるのは、高大連携や産学連携など連携の在り方を考えるべきではないか。企業と大学、高校と短大がどのように連携していくかという連携の話も入れても良いと思う。
- ・ 全国的に短期大学が少なくなっているが、必ず四年制大学に行くかという、就職や専門学校に行くという選択肢もあり、そこも考えていかないといけないと思う。
- ・ その辺りの実態や18歳人口がどこまで鹿児島に定着しているのか、そこにそれぞれの機能というものがどのように位置付けられるかというようなことも分析する必要があると思う。